

往生要集 第七

將に此の『集』を釈せんとするに、經論を釈するに準ぜば三門有るべし。一には大意、二には釈名、三には入文解釈なり。

## 一、大意

初に大意とは、夫れ法性平等にして淨穢を離ると雖も、亦復染淨緣起、因緣仮有を離れず。是の故に仏厭穢欣淨を勧めたまふ。但し厭と雖も空の厭なり、欣と雖も空く欣ひて、若し其の行なくば終に獲る所なし。是の故に念仏を修して往生を願求す、是れ其の大意なり。

## 二、釈名

二に題目を釈すとは、

「往生」と言ふは、草庵に目を瞑ぐの間、便ち是れ蓮台に趺を結ぶの程。即ち弥陀仏の後に従ひ、菩薩衆の中に在り、一念の頃に西方極樂世界に生ずることを得。故に往生と言ふなり。

次「要」とは、此の『集』の中に念仏・諸行の二門有りと雖も、しかも諸行を以て、其の要と為さず、即ち念仏を以て往生の要と為すが故に。序に云はく。

「念仏の一門に依りて聊か經論の要文を集む」と。

第八念仏証拠門亦

「往生の要を直弁するに多く念仏と云ふには如じ」と。

又云はく。

「明かに知んぬ、契經に多く念仏を以て往生の要と為す」。

此れ等の意に依るに、要の言は唯念仏に局て諸行に通ぜず。

次に「集」とは、広く經論に依りて念仏往生の文を撰集す、故に集と言ふなり。

此の『集』に上中下有り、故に卷上と言ふのみ。

## 三、入門解釈

三に入文解釈とは、此れ二の意有り。

処々に多く念仏を以て往生の要となす。その文一に非ず。惣結の要行に云く。「往生之業念仏為本」(料簡410)

一には三段を分別し二には章門開合を明す。  
一に三段を分別すとは、三段と言ふは、一には序分、二には正宗分、三には流通分。一に序分とは、初に「夫れ往生の極樂」より「廢忘に備へんや」に至るまでは、是れ序分なり。二に正宗と言ふは、「大文第一」より下卷の末へ『宝性論』の偈に至るまでは、正宗分なり。三に流通と言ふは、下卷内題の奥七言四句の偈、是れ流通分なり。

二に章門の開合を明すとは、先づ開し次に合す。  
先づ開とは、序の中に云ふが如く  
「総して十門有り、分ちて三卷と為す。一には厭離穢土乃至十には問答料簡。」  
是れ則ち開の義なり。

次に合とは、前の十門を束ねて五門と為す。謂はく  
一には厭離穢土門、  
二には欣求淨土門、此の門の中に即ち第三の極樂証拋門を撰す。  
三には正修念仏門、此の門の中に即ち助念・別時・利益・証拋の四門を撰す。  
四には往生諸行門、  
五には問答料簡なり。

問うて曰はく。十門の次第造主定んで其の意有るべし、今何が故ぞ末学庸稟輒く開合の義を論ずる、何の故か有るや。

答へて曰はく。第三極樂証拋門の意は、即ち第二欣求淨土門の疑を釈す。謂はく十方及び都率に対して、唯偏へに西方の一義を釈成す。故に一門と為す。

問うて曰はく。何が故ぞ第五・第六・第七・第八、之れを合して一門と為るや。

答へて曰はく。正助・長時・別時・修因得果の義に依りて、一往之れを開いて五門と為すと雖も、諸行に対するに、五門共に是れ念仏なるが故に、亦合して一門と為す。故に序の中に云はく。

「念仏一門に依りて聊か経論の要文を集む」と。云々

又第八念仏証拠門の中に、

「問うて曰はく。一切善業各利益有りて、各往生を得、何が故ぞ唯念仏の一門を勧めるや。」

第九門の初に謂はく。

「極樂を求める者、必ずしも念仏を専にせず、須く諸行を明して、各樂欲に住すべし。」

序の中に「一門」と言ふは、総じて一部十門の中に言ふ所の念仏を指して、「依念仏一門」と云ふ。是れ則ち諸行に対して之れを論ず。

第八念仏証拠門の中に言ふ所の「一門」とは、上の正修念仏已下の四門を指す、亦諸行に対して一門と云ふなり。

第九門の初に「念仏」と言ふは、一門の言なしと雖も、意は正修已下の五門を指して念仏と云ふなり。是れは諸行に対して亦念仏と云ふ。

此の『往生要集』に就いて<sup>㊦</sup>と<sup>㊧</sup>と要と有り。

㊦

㊦とは、此の一部三卷に序・正・流通有り、厭離等の十門を束ねて以て広と名く。十門とは、一には厭離穢土、二には欣求淨土、三には極樂証拠、四には正修念仏、五には助念方法、六には別時念仏、七には念仏利益、八には念仏証拠、九には往生諸業、十には問答料簡なり。

# 一、厭離

初の厭離に就いて七有り。

一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天、七には總結なり。地獄に就いて八有り。

一には等活、二には黒繩、三には衆合、四には叫喚、五には大叫喚、六には焦熱、七には大焦熱、八には無間なり。

## 二、欣求

欣求に十有り。  
一には聖衆來迎樂、二には蓮花初開樂、三には身相通樂、四には五妙境界樂、五には快樂無退樂、六には引撰結緣樂、七には聖衆俱會樂、八には見仏聞法樂、九には隨身供仏樂、十には増進仏道樂なり。

## 三、極樂証拠

396

次に極樂の証拠に二有り。  
一には十方に對し、二には都率に對す。

## 四、正修念仏

次に正修に就いて五有り。

一には礼拝門、二には讚嘆門、三には作願門、四には觀察門、五には回向門なり。  
此の中に、作願門に付いて二有り。

一には緣事の四弘誓願、二には緣理の四弘誓願なり。

次に觀察門に就いて三有り。

一には別相觀、二には總相觀、三には雜略觀なり。此の中に、雜略觀有り、略極觀有り。

## 五、助念方法

次に助念方法に就いて七有り。

一には方所供具、二には修行相貌、三には對治懈怠、四には止惡修善、五には懺悔衆罪、六には對治魔事、七には總結要行なり。

此の中に、修行の相貌に就いて、四修有り、三心有り。

四修とは、一には長時修、二には懸重修、三には無間修、四には無余修なり。

三心とは、一には至誠心、二には深心、三には回向發願心なり。

次に止惡修善に就いて五の因緣有り。

一には持戒不犯、二には不起邪見、三には不生驕慢、四には不恚不嫉、五には勇猛精進なり。

六、別時念仏

次に別時念仏に就いて二有り。  
一には尋常の行儀、二には臨終の行儀なり。

七、念仏利益

次に念仏の利益に就いて七有り。

一には滅罪生善、二には冥得護持、三には現身見仏、四には当来勝利、五には弥陀別益、六には引例勸信、七には悪趣利益なり。

八、念仏証拠

次に念仏の証拠に就いて三重の問答有り。

九、往生諸行

次に往生諸行門なり。

十、問答料簡

次に問答料簡に就いて十有り。

一には極楽の依正、二には往生の階位、三には往生の多少、四には尋常の念相、五の臨終の念相、六には龜心妙果、七には諸行勝劣、八には信毀因縁、九には助道資縁、十には助道人法。云々  
此れを以て広と名く。

略例

七法出文

又略とは、助念方法の中の総結要行の七法是れなり。文に云はく。

「問。上の諸門の中に、陳ぶる所既に多し、未だ知らず何の業をか往生の要と為る。答。大菩提心、護三業、深信至誠常に念仏すれば、願に随ひて決定して極楽に生ず。」已上

私釈

問意

私の意は、「上の諸門」とは、厭離等の五門を指すなり。

「所陳は既に多」とは、厭離に七有り、欣求に十有り、証拠に二有り。正修に五有り、助念に七有り。是の如き諸門の中に、陳ぶる所既に多し。未だ知らず何の業をか往生の要と為すと問うなり。

答意（釈七法）

菩提心

護三業

○問

▽答

答の意は、且く問に准じて七法を撰んで以て往生の要と名くなり。上の五門の中に、厭離・欣求・証  
拠の三門は要にあらず、故に捨てて取らず。

「大菩提心」とは、上の正修念仏門の中に五念門有り、其の中に作願門を取るなり。

「護三業」とは、上の止惡修善の中に止惡邊を取るなり。

問。止惡の中に十重・四十八輕有り、共に之れを取るか。

答。然らず、正しく十重を取るなり。故に下の文に云はく。

「三業の重惡能く正道を障ふ、故に須く之れを護るべしと、」  
是れなり。

深信

至誠

常

念仏

○問

▽答

「深信」とは、上の修行の相貌の中に四修・三心有る、三心の中に深信を取るなり。

「至誠」とは、至誠心を取るなり。

「常」とは、四修の中に無間修を取るなり。

「念仏」とは、上の五念の中に觀察門を取るなり。

問。觀察門の中に、称念有り觀念有り、正しくは何の念ぞや。

答。称念を取るなり。故に下の文に

「称念仏は是れ行善なり」と云ふなり。

隨願

「隨願」とは、上の三心の中の回向發願心を取る。

故に「大菩提心護三業深信至誠常念仏隨願決定生極樂」と云ふ。

此れ尚問に准じて要否を尋ねと雖も、是れ且く助念仏の意なり、此の集の正意にはあらざるなり。

問。何を以てか知ることを得たる、正意にあらざるとは。

答。止惡修善の中に云はく。

○問  
▽答

「問。念仏すれば且く自ら罪を滅す、何ぞ必ずしも堅く戒を持せん。答。一心に念ぜば、誠に責める所の如し。然に尽日に念仏して閑に其の実を検るに、淨心は是れ一両、其の余は皆濁乱なり。乃至是の故に要ず当に精進に淨戒を持て、猶明珠を護るが如くすべし。」  
故に知ぬ、如説に念仏せば必ずしも持戒等を具すべからず。  
此れを以て略と言ふなり。

「第七総結要行とは、

問。上の諸門の中に、陳ぶる所既に多し、未だ知らず何の業をか往生の要と為す。

答。大菩提心あて三業を護る、深信・至誠にして常に念仏すれば、願に随ひて決定して極樂に生ず。況や復余の諸の妙行を具せんをや。

問。何が故ぞ此れ等を往生の要と為るや。

答。菩提心の義、前に具に釈すが如し。

三業の重惡能く正道を障ふ、故に須く之れを護るべし。

往生の業には念仏を本と為す。

其の念仏の心、必ず須く理の如くすべし。故に深信・至誠・常念の三事を具す。

常念に三の益有り。迦才の云ふが如し。

一には諸惡覺觀畢竟して生ぜず、亦業障を消すことを得。二には善根増長して、亦見仏の因縁を種ることを得。三には熏習熟利して、命終の時に臨みて正念現前す。已上

業は願に由りて転ず。故に隨願往生と云ふ。

総じて之れを言はば、

三業を護るは是れ止善、

念仏を称するは是れ行善なり。



再釈

釈初問

399

菩提心及び願は此の二善を扶助す。

此れ等の法を往生の要と爲す。其の旨経論に出でたり。之れを具にすること能はず。」

私に云はく。此の第七の總結要行とは、是れ則ち此の集の肝心なり、決定往生の要法なり。学者更に之れを思釈して、其の要否を識るべし。

文に二の問答有り。

且く初の問の中に、「上の諸門」とは、上に五門有り。一には厭離穢土、二には欣求淨土、三には極樂証拠、四には正修念仏、五には助念方法なり。故に此れ等を指して上の諸門と云ふなり。

次に「陳ぶる所既に多し」とは、厭離門に七章有り、欣求門に十章有り、証拠門に二章有り、正修門に五章有り、助念門に六章有り。此れ等の諸章に明す所既に多し、故に所陳既に多しと云ふなり。

次に「未だ知らず何の業をか往生の要と爲す」とは、上の諸門に於て各述る所の行、既に条数有り。要否の法に於て、学者識りがたし、要法を決するが爲の故に「未だ知らず」と云ふなり。

釈初答

一、粗答意

二、正釈答文

約五門

次に答の中に二有り。

一には粗ぼ答の意を述す、二には答の文を釈す。

初に答の意とは、問の意既に上の諸門の行より出で、其の要否を問う。故に答の中に、又上の諸門の中に於て、其の要を簡んで其の要行を示す。是れ則ち答の中の大意なり。

次に正しく答の文を釈すとは、又分ちて二と爲す。一には総じて五門に約して之れを簡ぶ、二には別して二門に約して之れを簡ぶ。

初に総じて五門に約して簡ぶとは、上の厭離等の三門は、是れ往生の要にあらず故に簡んで取らず、第四・第五の二門は、正しく是れ往生の要行なり。故に答の中に「大菩提心護三業」等と云ふ。大菩提及び念仏とは、是れ則ち第四の門なり。

今この五門の中、厭離と欣求は即ち修行の方便なり。念仏と修行との二門は正しく往生の業因なり。その業因に就いて要あり、不要あり。即ち念仏の一門を要となす。諸行の一門は要に非ず。(註要419)

約二門

「護三業深信至誠」等とは第五門なり。是れ則ち総じて諸門に約して其の要を挙て、其の要否を簡ぶなり。

次に別して二門に約して簡ぶとは、又二有り。

一には第四門に約して之れを簡ぶ、

二には第五門に約して之れを簡ぶ。

約第四門

400

初に第四門に約すとは、之れに就いて亦五門有り。

一には礼拝門、二には讃嘆門、三には作願門、四には觀察門、五には回向門なり。

此の五門の中に作願と觀察との二門を以て往生の要と為す。余の三門は是れ要にあらざるが故に、今「菩提心及念仏」と云ひて、又更に礼拝等と云はず。

又菩提心に就いて事有り理有り。文の中に未だ之れを簡ばずと雖も、若し念仏に例せば、且く事を以て往生の要と為すなり。

念仏

又念仏と云ふは、是れ觀察門の異名なり。然に念仏の行に於て、又觀想有り、称名有り。二行の中に於ては、称名を要と為す。故に次の答の中に

「称念仏は是れ行善」なりと。云々

之れを以て『往生要集』の意、称念仏を以て往生の至要と為るなり。

約第五門

次に第五門に約すとは、之れに就いて又六有り。

一には方处供具、二には修行相貌、三には対治懈怠、四には止惡修善、五には懺悔衆罪、六には対治魔事なり。

此の六法の中に、第二・第四の二門を以て往生の要と為す。第一・第三・第五・第六の四門は是れ往生の要にあらざる。故に捨てて取らざるなり。

就第二門

第二門に就いて、又四修有り、三心有り。

常  
三心

就第四門

401

護三業

結釈

釈次問答

四修とは、一には長時修、二には堅重修、三には無間修、四には無余修なり。四修の中に於て、唯無余修を取りて其の要と為す、余の三は要にあらざるなり。故に文に『要決』を引いて云はく。

「三には無間修、謂はく常に念仏して往生の想を作せ。」と

三心に於ては全く取りて棄てず、皆是れ往生の要なればなり。故に文に

「深信至誠常念仏及隨願」と云ふ、則ち是の意なり。

外儀は異なりと雖も心念は常に存ぜよ。念念に相續して、寤寐に忘るること莫れ。この句の中に常の字は即ち無間の義なり。然れば四修中の無間修なり。（註要420）

次に第四門に就いて亦六有り。

一には持戒不犯、二には不起邪見、三には不生驕慢、四には不恚不嫉、五には勇猛精進、六には誦誦大乘なり。

六法の中に於て、唯第一を取りて往生の要と為す。文に「護三業」と云ふ。要とは是れ則ち持戒・不犯なり、

余の五は要にあらざるが故に棄てて取らざるなり。謂はゆる戒とは、是れ菩薩戒なり、声聞戒にはあらず。其の旨文に見えたり。但し菩薩戒に於て、亦十重有り、四十八輕有り。今の意は輕を捨て重を取る。故に文に「三業重惡」と云ふ。

つらつら此の問答を案するに、此の『要集』の意に依りて往生を遂んと欲る者は、先づ縁事の大菩提心を発し、次に十重木叉を持て、深信と至誠とを以て、常に弥陀の名号を称し、願に随ひて決定して往生を得べし。是れ則ち此の『集』の正意なり。

次に又問答有り、菩提心等の七法を以て往生の要と為して、其の由を問答するなり。其の文見易し、繁を恐れて記せず。

簡下五門

但念助念

又上の厭離等の五門に於て要否を簡ぶこと、既に以て此の如し。下の別時等の五門、亦至要にあらずること、之れを以て知るべし。

又念仏に於て二有り。

一には但念仏、前の正修門の意なり。

二には助念仏、今の助念仏の意なり。

此の『要集』の意は、助念仏を以て決定業と為るか。但し善導和尚の御意は爾らず。云々

三に要とは、念仏の一行に約して勸進する文是れなり。

第四の正修念仏門の中の觀察門に云はく。

要例

『觀察門』引文

「初心の觀行は深奥に堪えず。乃至是の故に色相觀を修すべしと。此れを分ちて三と為す。一には別相觀、二には總相觀、三には雜略觀なり。意樂に随ひて之れを用るべし。

初に別相觀とは。云々

二に總相觀とは。云々

三に雜略觀とは。云々

若し相好を觀念するに堪えざること有らば、或は歸命想に依り、或は引摺想に依り、或は往生想に依りて、一心に稱念すべし。（已上意樂不同なるが故に種々の觀を明す）

行住坐臥、語默作々常に此の念を以て胸中に在ること、飢て食を念ふが如く、渴して水を追ふが如く、低頭挙手にして、或は声を挙て稱名せよ。外儀は異と雖も、心念は常に存して、念々相續して寤寐に忘る莫れ。」云々

勸進念仏一門

## ①難行易行対

「問うて云はく。一切の善根各利益有り、各往生を得、何が故ぞ唯念仏の一門を勧めるか。」

答。今念仏を勧めることは、是れ余の種々の妙行を遮すにはあらず、只是れ男女・貴賤、行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず、之れを修するに難からず。乃至臨終に往生を願求するに、其の便宜を得ること、念仏にはしかず。故に木槌經に云はく。

難陀国の波瑠璃王、使を遣して仏に白して言はく。唯願はくは世尊、特に慈愍を垂て我に要法を賜へ、我をして日夜に修行得易くして、未來世の中に衆苦を遠離せしめたまへ。仏大王に告げたまはく。若し煩惱障・報障を滅せんと欲はば、当に木槌子百八を貫て、以て常に自ら随ふべし。若し行若し住、若し坐若し臥に、恒常に至心にして分散の意なく、仏陀・達磨・僧伽の名を称して、乃至一木槌子を過ぐすべし。是の如くして若し十若し千、乃至百万億すべし。若し能く二十万返を満て、身心乱れず、諸の諂曲なくば、命捨て第三の炎魔天に生ずることを得て、衣食自然にして、常に安樂を受けん。若し復能く一百万返を満てば、当に百八の結業を除断することを得て、生死の流転を背き涅槃の道に趣いて、無上の果を獲べし。（略抄感禪師の意之れに同じ）

況や復諸の聖教の中に、念仏を以て往生の業と為す。其の文甚だ多し。略して十文を出ださん。

一には占察經の下卷に云はく。

若し人他方現在の淨国に生ぜんと欲はば、当に彼の世界の仏の名字に随ひて、意を專にして誦念すべし。一心不乱なること上の觀察の如くなれば、決定して彼の仏国に生ずることを得て、善根増長し速に不退を成ず。（如上の觀察とは地藏菩薩の法身及び諸仏の法身或は自身本来無上不生不滅常樂我淨功德圓滿を觀じ又己身の無常幻の如しと觀じ厭べき等なり）

## ②少分多分対

(弥陀自説)

(觀勝称劣)

- ③ 因明直并対
- ④ 自説不自説対
- ⑤ 摂取不摂取対

⑥ 隨宜理尽対

二には双卷經の三輩の業、浅深有りと雖も、然も通じて皆一向專念無量寿仏と云へり。

三には四十八願の中に、念仏門に於て別して一願を發して乃至十念若不生者不取正覺と云ふ。

四には觀經の極重惡人。云々

五には同經に云はく。若欲至心。云々

六には同經に云はく。光明遍照。云々

七には阿彌陀經に云はく。不可以少善根。云々

八には般舟經に云はく。阿彌陀仏言はく。欲來生我國者。云々

九には鼓音声經に云はく。若有衆生。云々

十には往生論に云はく。彼の仏の依正の功德を觀念して、往生の業と為す。云々

此の中に觀經の下品、阿彌陀經・鼓音声經、俱に仏名号を念ずるを以て往生の業と為す。何を況や相好を觀念せん功德をや。

問。余行寧ろ勸進の文なからんや。

答。其の余行の法は、因に彼の法の種々の功德を明す、自ら往生の事を説くに、直に往生の要を弁じて、多く念仏と云ふにはしからず。何を況や仏自ら唱て当念我名と言ふをや。亦仏の光明余行の人を摂取すと云はず。此れ等の文分明なり、何ぞ重ねて疑を生ぜんや。

問。諸經の所説、機に隨ひて万品なり、何ぞ管見を以て一文を執するや。

答。馬鳴菩薩の大乗起信論に云はく。復次に衆生、初て此の法を學せんに、其の心怯弱にして信心成就すべきこと難しと懼畏して、意に退んと欲せば、当に知るべし、如來に勝方便有して、信心を摂護したまふ。心に隨ひて意を專にして念仏する因縁をもて、願に隨ひて他方の淨土に往生することを得。修多羅に説くが如し、

## 私釈

## 釈第一問答

若し人専ら西方の阿弥陀仏を念じ、所作の善根を回向して彼の世界に生ぜんと願求せば、即ち往生を得と。  
明らかに知ぬ、契経に多く念仏を以て往生の要と為すことを。  
若し爾らずんば、四依の菩薩即ち理尽ならず。」云々

私に云はく。此の中に三番の問答有り。

初の問の意は見るべし。唯勸の語は正しく上の觀察門の中の「行住坐臥」等の文を指すなり。其の故は、一部の始末を尋ぬるに、慇懃に勧進すること只觀察門に在り。余の門の処には全く見ざる所なり。

答の中に二義有り。

- ① 難行易行
- ② 少分多分

一には難行・易行、謂はく諸行は修し難く、念仏は修し易し。  
二には少分・多分。謂はく諸行は勧進の文甚だ少く、念仏は諸経に多く之れを勧進すと。

## 釈第二問答

次の問答の中に、問の意は知りぬべし。  
答の中に三義有り。

- ③ 因明直弁

一には因明と直弁となり。謂はく諸行は専ら往生の為に之れを説かず、念仏は専ら往生の為に撰んで之れを説く。

- ④ 自説不自説

二には自説と不自説となり。謂はく諸行は阿弥陀如来自ら當に之れを修すべきを説かず、念仏は仏自ら當に我名を念ずべしと説きたまふ。

- ⑤ 撰取不撰取

三には撰取と不撰取となり。謂はく諸行は仏光之れを撰取したまはず、念仏は仏光之れを撰取す。

## 釈第三問答

- ⑥ 隨機理尽

次の問の意は知りぬべし。  
答の中に一義有り。如来の隨機と四依の理尽となり。

諸行の一門には、纔かに行の名を列すと雖も、未だ細かに行相明かさず。各の樂欲に任す。未だ慇懃に行者を勧めず。念仏の一門は但念助念長時、行相と云い、利益と云い、或いは証拠を引き、或いは、道理を尽くして分明にこれを尽し、慇懃にこれを勧む。ここに知んぬ。恵心の御意ろ、専ら念仏を以て往生の要と為す。(註要423)

然るに觀念と稱念と勝劣あり難易あり。即ち觀念は勝、稱念は劣なり。  
勝劣に依て先ず觀念を勧むと雖も、難易に約せば専ら唯だ稱念を勧むる也。而るにこの集意、始より終に至るまで難を勧めて易を取る。(註要424)

道綽禪師

善導和尚

私釈

謂はく諸行は釈迦如来衆生の機に随ひて之れを説きたまふ、念仏は四依の菩薩理を尽して之れを勧めたまふ。是れ則ち此の『集』の本意なり。委く之れを思ふべし。

往生階位に云はく。

「問。若し凡下の輩往生を得ば、云何近代彼の国土に於て求むる者は千万なれども、得るものは一二もなきや。

答。綽和尚の云はく。

信心深からず、存するが若く亡するが若くなるが故に。信心一ならず、決定せざるが故に。信心相続せず、余念間るが故に。此の三は相応せざれば、往生すること能はず。若し三心を具して往生せずといはば、是の処は有りことなけん。

善導和尚の云はく。

若し上の如く念々相続して畢命を期と為す者は、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず。若し専ら捨てて以て雑業を修せんと欲ふ者は、百の時に希に一二を得、千の時に希に三五を得と。(如上とは礼拝等の五門至誠等の三心長時等の四修を指すなり)」

私に云はく。恵心理を尽して往生の得否を定めたまふには、善導・道綽を以て指南と為すなり。

又処々に多く綽と・導を引いて、彼の師の釈を用ひ之れを見るべし。然ば則ち恵心を用ひるの輩は、必ず道綽・善導に帰すべしとなり。之れに依りて先づ綽師の『安樂集』を披て、之れを覽て聖道・浄土の二門の仏教を分つの釈之れを見よ。次に善導の『観經の疏』之れを見るべし。

今これらの文に拠るに恵心も詮要には善導の專雜二修を引きて往生の得否を決す。而も雜修雜行を嫌いて專修を勧むの志、これを以て知るべし。  
(詮要425)